

しがじん VOL.22 2020.12

# SHIGAJIN

全障研滋賀支部発行 TAKE FREE!

特集 「一歳半の発達を学ぶ 学習講座」

コロナ禍の下での「みんなの思い・ねがい」2



# 一歳半の発達を学ぶ



10月18日(日)に障害者問題研究第44巻第2号をテキストに、『1歳半の発達を学ぶ』学習会を開催しました。当初は6月に100人規模の学習会をと企画していましたが、新型コロナウイルスの感染が広がる中で延期を決め、オンラインでの開催へと踏み切りました。滋賀支部初のオンラインでの学習講座の開催になりましたが、149名の方にご登録いただきました。

講座では、別府哲さんに自閉スペクトラム症と1歳半の節、竹内未央さん、別所尚子さんに大津市における乳幼児健診と子育て支援、白石正久さんに1歳半の節と発達保障をご講義いただきました。



別府さんからは自閉症児の育ち、関係を作る時のプロセスの特徴、共有する世界を作る大切さなどをご講義いただきました。定型発達の場合、1歳半は「〇〇デハナイロロダ」という操作様式の獲得に伴い、「時空間のつながり」と「自己と他者の意図のつながり、調整」の両者を同時期に獲得していくとのことですが、自閉症がある場合は「自己と他者の意図のつながり、調整」に弱さがあるため、「問題行動」を引き起こしやすいとのこと。支援の在り方としては、子どもとの間に楽しい共有世界を作る関わりが大切であり、その過程で支援者がその子にとっての「好きな人」、さらには「支えとなる人」として位置づいていき、次第に「問題行動」がなくなっていくということでした。つまり、そんな子どもたちに関わる教師や支援者の専門性とは、目の前の子どもたちを楽しませること、魅力的な活動を用意して、世界を共有であるということ学びました。

竹内さん、別所さんからは、大津市の乳幼児健診について、10ヶ月、1歳半の子どもの育ちに対する支援、保護者への支援などをご講義いただきました。「第2者の存在」が良い形で積み上がっていない子どもに対しての子どもたちへの支援、保護者への支援など、この時期の発達段階の子どもたちに関わる時の大切なヒントがたくさんあったのではないかと思います。

白石正久さんからは、1960年代後半の近江学園での実践の紹介を通して、生活や指導の在りかたについて話していただきました。当時の近江学園では子どもの数が減ったことに伴い、「きめ細やかな行き届いた指導」が展開されていたようです。しかし、その細分化したわかりやすい生活場面の設定が、かえって子どもたちの自発性や主体性を奪ってしまっているのではないかとという危惧があげられていきます。当時議論されていた①集団を大きく②部屋をたくさん③時間を大きく④所有物を豊かに、という4つの項目は今でも私たちが障害児者の生活を考える際に大切なことではないかと思いました。お話の中で、子どもが「かわいい」と思えない時、大人が子どもの要求と切り離された何ものかに縛られているという言葉に改めて私自身、普段の子どもとの関わりを振り返る機会になりました。



それぞれの先生方の講演を聞きながら、現場のことを思い返してみると、「時間的な捉えは得意だからスケジュールを示すほうが良い」「手持ち無沙汰になると『問題行動』をとりがちだから、切れ間なく課題を与えたほうが良い」といった主張が横行していることに気がつきます。また、自分自身の実践



を振り返ると、子どもとの関係を築くことに重点を置き、どのような遊び、どのような活動を通して関係を作っていくのかという視点が弱かったことに気づきます。今一度、自らの子どもとの関わりや実践の中身を問い直すと共に、“間”をもたせない教育実践の流れへの対抗軸として、発達について理解を深める必要性があると感じました。

オンラインでの開催についても、沢山のご意見をいただきました。コロナ禍でのオンライン開催はありがたいといったご意見や、地元以外でも交通費等の負担がなく参加できるといったご意見など、今回のオンライン開催について肯定的なご意見を多数いただきました。一方で課題も見えてきました。内容によっては、個人情報取り扱いの難しさがあったり、顔が見えないことで論議を深めることの難しさがあったりします。また、それ以上に、これまで大切にしてきた顔と顔を合わせての学び合いや互いの息づかいを感じながらの論議など、なくしてはいけないものもたくさんあるように思うのです。今後も、学習講座の内容やコロナウイルスの感染拡大状況を踏まえて講義形式を検討し、障害児者に関わる方々の学びを深める場や、語り合う場を滋賀支部として作っていきたいと考えています。今回の学習講座にご参加いただいた皆様、本当にありがとうございました。

(竹下光・長友志航)

## たくさんの感想をいただきました！！



1歳半の節というフレーズを始めて聞きました。話を聞く中で、生後6か月ごろからの興味関心の発達、8か月ごろの人見知りと10か月ごろの支えとなる人の存在による挑戦など、一つひとつの事象を細かく教えていただき、とても勉強になりました。

個人的に印象的だったことは、自閉症と言えば構造化みたいな印象を持っていて、それに対して空間時間のマッチングは得意な所ではあるが、そこを強化してばかりいると気持ちの気づきや自己決定が弱まるという言葉に衝撃を覚えました。実際に関わる児童の中で落ち着いてきたとも捉えられるのですが、覇気がないともいえる児童がいます。新しい視点を頂けたので、自分のできる範囲での関わりを工夫してみようと思います。ありがとうございました。

(放課後等デイサービス指導員 20代)



子どもたちの支えとなる人でありたいと、強く思いました。子どもたちが『思い出したくなるほどの楽しい経験』を共有していきたいです。明日からまた、気持ちを新たに気持ちのよいスタートがきれそうです。

(児童発達支援管理責任者 40代)

普段、2.3歳の発達段階の子どもたちのグループで授業をしています。また、改めて授業づくりの視点を学ばせてもらい、勉強になりました。分かってはいるけど実行できない段階の子どもたちがたくさんいて、ともすれば叱られてしまうことも多くなってきているのが悩み



で、どう話し合いを進めていくかを考えていたところでした。一方で、先生が受け入れ続けてしまい、学びの場に戻れず、学ぶ機会、自分で納得して折り返す機会を失ってしまうということも増えています。もう一度、私たちがどう支えるのか丁寧に話していきたいです。

(養護学校教員 40代)

別府先生の講義では、1歳半の節に向けて生まれる4つの力のバランスが大切なこと、特に対人面の弱さを持つ場合に、好きだけでなく心の支えとなる人をどうその子の中に作っていくかについて、改めて意識することができました。大津市の乳幼児健診やゆめっこのお話を通じたその後の支援は、具体的にどのような視点で子どもを捉え、保護者を支えていくのかを考える機会になりました。白石先生の講義では、近江学園の取り組みと職員の方の方針転換の中に、子どもの姿から学び取る姿勢を感じることができ、私もそのような支援でありたいと改めて思いを深めました。貴重なお話を聞かせていただきました。今後



(発達相談員 40代)

1歳半の節目にいる子どもたちの担任をしています。実際関わる子ども姿を思い浮かべながらお話を聞くことができました。時間やスケジュールに追われ、子どもの好きな世界をじっくりたっぴりと共有したり、自分で切り替えられる間をもったりすることが、おろそかになっていたと気が付きました。小学部低学年の子どもたちであり、まだまだ大人との関係を時間をかけても、じっくりと築いていくことが大事なのだと感じました。



(特別支援学校教諭 30代)

講義はどれも分かりやすく有意義な時間となりました。個別対応ばかりに目が向くと、集団との関係性を断ち切ってしまう、利用者間のやりとりの機会も大切だということを生動的な視点も含めて説明していただけたのでとても勉強になりました。特に、別府先生の講義「自閉スペクトラム症と一歳半の節」の中で話されていた『構造化の功罪』という言葉、心にとっても響きました。私の事業所にも行動障害を呈する方が多くいます。「相手の心に気づき始める」「自己決定する自分の出現」ということに弱さはあるけど、楽しみの共有や心のやりとりを通して少しずつ獲得していくということを学ばせていただきました。自閉症だからこうだと決めつけるのではなく、学んだことも含め利用者自身と向き合っていきたいと思いました。白石先生の講義で話されていた近江学園の実践からの話もとても印象的でした。個人にばかり目を向けたり、排他的になったりするのではなく、仲間同士の関係も大切に、いつでも集団にかえるという視点を持ちながら実践を重ねたいと思いました。



(おおつ福祉会 伊香立の杜 (いかだちのもり)木輝(ここ) 藤井 美沙子)



## オンライン開催についての感想・ご意見

普段ではなかなか仕事を休んで遠くまで研修に行くことができないので、今回のようにオンラインでお話を聞くことができたのはとてもうれしく思います。会場で直接お話を聞くのもしたいところですが、今後もオンラインでの講義があれば参加しやすいです。

コロナ禍でも学びを止めない、という点ではオンラインの学習会は有効で、地元以外の方も気軽に、時間やお金の負担が少なく参加できるメリットもあります。一方、各支部だからこそその課題についての取組や地域ならではの共通する話題などは、対面で行うなど、これからは使い分けが必要になってくるのかな、と思いました。

進行もとてもスムーズで、あっという間の4時間でした。小さな子供がおり、なかなかこういった会に参加することが難しかったのですが、自宅から参加できたことが本当にありがたかったです。

たくさんの方のご参加、そして貴重なご意見  
本当にありがとうございました。



\*次回 学習会のお知らせ\*

### 「全障研会員オンライン交流会」

**日時:2月7日(日) 14:00~ zoomを使用してリモートで行います。**

会員同士の交流を深めることを目的に、学校現場、福祉現場、就学前の現場など様々な立場からパネリストをお呼びし、みんなで実践や今の思いを深めていきたいと思えます。コーディネーターとして滋賀支部・支部長の白石恵理子先生をお迎えします。

今回の交流会を機に、新規会員になってくださる方も大歓迎!

詳しい参加方法などは滋賀支部HPにUPしていきますのでそちらをご覧ください。

全障研滋賀支部



## コロナ禍の下での「みんなの思い・ねがい」

前回のしがじん21号にて、コロナ禍の下での様々な方の思いを掲載しました。

22号では全障研発行の「みんなのねがい」7月号で「新型コロナウイルス感染症の拡大と私たち」が特集されたことを受け、記事を読んで事務局員で話し合い、学びを深めました。皆様のご意見もぜひお知らせください。

### 「当事者の声から伝わってくること」—みんなのねがい緊急特集を読んで—

2月末に突然発表された休校措置。その後の緊急事態宣言は、私たちに考える間を与えることもなく、結論だけを押つけました。それを“まるで「大本営発表」だ”と評した人がいますが、長く生きている中で初めて経験した『自粛』という名の規制でした。

あれから半年以上が過ぎ、マスク、フィジカルディスタンスなどの「新しい生活様式」が定着しつつあります。そしてコロナ禍での生活の様子が少しずつ伝えられるようにもなっています。

『みんなのねがい』7月号の緊急特集「新型コロナウイルスと私たち」にもたくさんの声が紹介されていますが、特集を読んで考えたことを報告します。



特集では、まず初めに当事者の声を紹介されています。コロナ禍で作業所を休んでいる大木さんは「在宅勤務って何ですか？職員は在宅勤務を始めました。職員の仕事は、ぼくたちの世話をしたり、いっしょに箱づめとかの作業をすることです、職員は家で何をしているの？ぼくも在宅でお仕事をしたいです。」と率直な思いを伝えています。グループホームで生活するS・Tさんは、「理事の人が来て、『お家に帰れる人はお家に帰ろう』と言いました。ぼくに『お家に帰って』と言いました。ぼくの家はここです。」と書いています。また精神障害のある斉藤さんは、コロナ禍で図書館が閉鎖され、無料Wi-Fiで情報を得ることができなくなり、情報難民になっていると訴えています。これらの思いは、自分では発信することの難しい重い障害のある人も含め、障害のあるすべての人に共通したものだと思います。

全国的には、休業や帰省の対応がとられた事業所は少数派だったのかも知れませんが、多くの事業所が当事者の権利を守るために今も最大限の努力を続けています。しかし、例え一部であったとしても「作業所でみんなと仕事がしたい」「(自分の家である)グループホームで暮らし続けたい」というあたりまえの願いを大切にできなかったのもまた現実です。

障害児教育・福祉は、医療と同様、障害のある人の命を守り、生きる権利を保障する仕事です。そのことの再認識と、そうはなっていない現実を実感させられました。それが1点目です。

2点目は、最近すっかり普通になってきた「リモート〇〇」についてです。リモートは、遠く離れた人とも簡単にアクセスできる利点もありますが、対面のように論議を深めて一致点を見つけ出ししていくことは難しいと感じます。また、先の斉藤さんのように情報難民になっている人や対面でのつながりや具体的な援助が保障されないことで、孤立化し、生活が著しく困難になっている当事者、家族もたくさんいます。

「With コロナ」のスローガンと共に、「Go To〇〇」など経済を活性化するために様々なキャンペーンが始まっていますが、それらを利用できるのは一部のゆとりのある人たちに限られています。障害のある当事者・家族から、選択肢を奪うのではなく、選択肢を増やせるような「新しい生活様式」の検討と政策が必要です。



(能勢ゆかり、森原都)

## 「今、学校ができること、すべきこと」

滋賀支部の事務局の中の現役の養護学校教員3名で、「みんなのねがい」特集記事から「暗闇で輝く北極星を探して」を読み合わせました。同じ特別支援学校教員の方が書かれたこの文章には突然の臨時休校による不安や不満、ネット回線を通しての学習などが進む中で、学校で子どもたちのためにできることはその子にとって必要なことを最大限の力で実践していくことだということが書かれていました。



臨時休校中、保護者は大変だったと思う。ずっと家の中にいて大人も子どももイライラがたまり、喧嘩が絶えないという話はたくさん聞いた。虐待してしまうかもしれないという不安もよくわかる。



学校の中でも意見が割れた。「保護者のために子どもを預かるべきだ」という意見と「命を守るための休校なんだから預かっては意味がない」という意見。どちらも気持ちはわかるからこそみんなにしんどさがあった。ただ、気になったのはどの意見も主語は保護者や学校。子どもにとっての学校の意義は置き去りにされてたように思った。



今回、学校教育がいかに「子ども抜きに決められてきたか」が浮きぼりになったよね。私の学校でも、今まで当たり前のようにやってきた行事や学習の内容が変わることがたくさんあったけど、そのなかで「今年のやり方の方が子どもに無理がなくてよかった」という意見がたくさんあった。今回のことが少しでもプラスに動くといいな。



この記事の中で「学校という場がなくても教育が成立する」という意見が聞こえるって書いてるけど、それってどうなんかな。子どもの内面を育てたいと思ったときに、やっぱり人と人とのかわりって実際に関わって経験して積み上げていくことが大切だと思う。



学校じゃなくても「学力」はつくのかもしれない。でも、学校で大切にしたい三つの間（仲間・空間・時間）は保証されないと思う。特に仲間や空間は実際に学校で作り上げていくもの。



学校が再開されて授業をする中で、やっぱり子どもたちは友だちのまねをしてみたり、教師や友だちと一緒にやってみて達成感を感じたり。そういう姿を一番大切にしたいと改めて思ったな。



今回の休校の中で自分の今までの子どもとのかかわりを振り返ることができた。子どもと寄り添うってどういうこと？とか、人と人として関わるってどういうこと？とか。



この記事の「固有名詞を有した一人ひとりを思い浮かべ、その子に必要なことを…」っていうのがまさに僕たちが大切にしたいこと。目の前の子どもに自分は人間としてどうするのか、毎回問題に直面するし、自分が丸裸にされている感じ。しんどいことも多いけど、それがこの仕事の醍醐味。このご時世の中でもそこだけは譲れない。



子どもと共感関係を作るには、やっぱりオンラインじゃ難しい。最近は何でもリモートになってるけど、大人同士の関係も本当に作れるのかなって思う。職場でもこんな風に子どものことについて話すこと減ったね。今日みたいな機会も、感染対策はしつつも保障していくことで、私たちの気持ちも整理されるし、子どものことをたくさん話す機会になるから大切にしたいな。



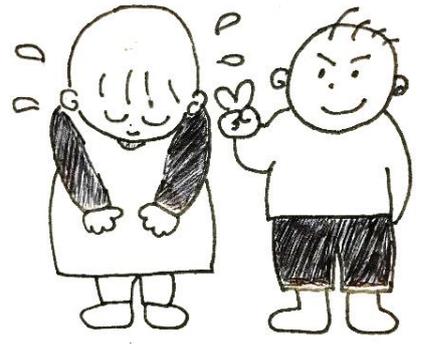
### PONTAのゆるい日々6

#### 変身ヒーロー編

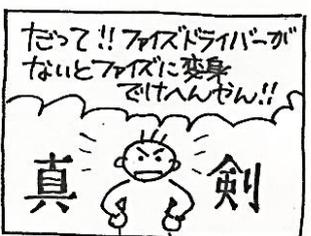


### PONTAのゆるい日々7

#### 変身ヒーロー編



母 ぽんた(19)



ふわふわことば(すごいね!ありがとう)を使う悪役で……

Ponta 17歳の秋

Pontaは、19歳のダウン症の男の子。三人きょうだいの末っ子。養護学校を卒業し、この4月からは作業所でお仕事をしています。

父や兄の影響で我が家には歴代のヒーローグッズが溢れています。漫画に出てくる仮面ライダーファイズが放送されていたのはPontaがまだ2歳のころ。そのころから変わらずずっと大好きで、ずっと憧れています(^o^)いつか変身できるといいね。

#### ◎編集後記

こんにちは。編集担当のにむらです(^o^)! しがじん22号いかかでしたか? いろいろな方の目に留まり、手に取っていただけることを願っています。今回の素敵な表紙写真はカメラを趣味にしている大好きなお友達、ぼんちゃん(もちろん仮名)に依頼しました。滋賀県の日吉大社で昨年撮られた写真だそうです。今年はなかなか紅葉を見に行くことが難しいご時世でしたが、この写真で少しでも秋を感じてもらえたらと思います。

コロナ感染が拡大しているため、滋賀支部の事務局会議も当面の間はオンラインで行われています。一歳半の発達を学ぶ学習会の報告にもオンラインの良さと課題が上がっていましたが、まさに私もそれを実感しています。仕事が終わりに、自分の家で晩御飯を食べたり家事をしたりしながら(ちゃんと話は聞いてます★)参加できるのはありがたいところ。でもやっぱり集まることでもらえる反応や、議論の広がりはあるなあと思います。あと、会議の楽しみだった皆さんからのおやつがもらえない...(ToT)

少しでも早くコロナが終息し、また皆さんと笑顔で会えますように! それまで皆さんお元気で(^o^)

